



欧州統合における低地地方(ベルギー・オランダ)の歴史的役割

奥西, 孝至

(Citation)

国民経済雑誌, 209(4):17-30

(Issue Date)

2014-04

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81008967>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81008967>



欧州統合における低地地方 (ベルギー・オランダ) の歴史的役割

奥　　西　　孝　　至

国民経済雑誌 第209巻 第4号 抜刷

平成26年4月

欧州統合における低地地方 (ベルギー・オランダ) の歴史的役割

奥 西 孝 至

低地地方は中世末期から近代初頭のヨーロッパにおいて商工業が最も発展した地域であり、ブルッヘ（ブルージュ）、アントウェルペン（アントワープ）、アムステルダムはそれぞれ15世紀、16世紀、17世紀ヨーロッパの商業・金融の中心都市であった。しかし、16世紀後半のスペイン・ハプスブルクに対する反乱の末に北部のみがネーデルラント連邦共和国（オランダ）として独立し「黄金時代」をむかえたのに対して、スペイン領にとどまった南部はそれまでの経済的な重要性を失い、その後の南北低地地方は多くの点で対照的な特徴をもつベルギーとオランダという国家へと発展した。そのため、経済史研究においてもそれぞれの国の特徴的な現象の解明に重点がおかれ、中世末期からの近代初頭についても低地地方内での中心の移行とともに南北低地地方諸地域の経済構造の差異が研究の焦点となってきた。しかし、中世末期から低地地方内の諸地域は相互に関連する中で機能を分担しながら発展し、低地地方内の中心都市も相互につながり、その規模と機能を拡大させながら中心地としての役割を継承してきたこと、また、同時期の低地地方において、市場経済化および地域統合を促進する社会経済構造や経済的な自由を保証する制度を可能にするボトムアップ型の政策決定構造が発達していたことが明らかになってきており、欧州統合の端緒となる近代初頭における低地地方の役割を理解するためには、低地地方を地域外との経済関係の拡大と平行して地域内の連関・分業関係を深化させた一つの地域として理解することが重要になっている。

キーワード 近代初頭、南北低地地方、中心都市、地域統合

1 はじめに

欧州連合（EU）は1951年4月18日パリにおいてドイツ、フランス、イタリア、ベルギー、オランダ、ルクセンブルクの6国が設立条約に調印した欧州石炭鉄鋼共同体（ECSC）を基として発展してきたことから、当時のフランス外相であったロベール・シューマンが石炭鉄鋼共同体の設立を提唱した1950年5月9日がヨーロッパ・デイとして1985年のミラノにおける欧州理事会において決定されている。シューマン宣言では、平和の維持に欠くことのできないヨーロッパの連邦化における実質的な基盤として、当時の基幹生産物であった石炭と鉄

鋼を共同管理しフランス、ドイツをはじめとする参加国に対して拘束力のある決定権をもつ欧州機構の設立が提唱されたように、ヨーロッパにおける和平構築には独仏和解ならびに両国が構成国となる国際組織の創設の必要性が主張されている。欧州統合を考える上で重要なのは、国境を越える経済関係が重要になる形で経済発展をとげてきたのがヨーロッパであるということであり、石炭鉄鋼共同体の発足によりルール、北フランス、ロワール・ザールを結ぶ重工業三角地帯が第2次世界大戦後のヨーロッパの経済復興に大きな役割をはたし、石炭鉄鋼共同体やその後に設立された欧州共同諸機構の発展に際しては、仲介者としてのベルギーの役割が重要な意味をもった。しかし、そもそも、19世紀におけるドイツ、フランスの製鉄業の発展は、ヨーロッパ大陸において最初に工業化したベルギーの製鉄業との資本・技術・人材などの面で国境を越えた相互関係の中で発展しており、その相互連関が政治的に分断されたことが第2次世界大戦の要因の一つとなっている¹⁾。

ヨーロッパは人口、経済規模も大きく異なる諸国が言語的・文化的独自性を維持する主権国家として存在していると同時に思想、制度などに様々な共通性をもった地域でもあり、現在28カ国が加盟、24カ国語を公用語とするEUは加盟各国の経済的・政治的な共通性を推進すると同時に言語的・文化的多様性を維持・強化するという「補完性原理」の政策をとっている。ヨーロッパがこのような多様性と共通性をもつ地域となったことには、1000年以上にわたるヨーロッパの歴史的経緯がある。

ヨーロッパは地形、気候、土壌、植生の多様性をもつユーラシア大陸の西端に、キリスト教ならびに古代ギリシア・ローマを起源とする思想・科学・芸術を共有する基盤としながらも、ラテン系、ゲルマン系、スラブ系などの言語的多様性をもつ諸民族が成立した。地理的諸要因の多様性を反映して地域により異なる農牧業が行われるものの、10世紀頃より次第に発達した遠隔地商業においては胡椒などの東方産品、高級毛織物、塩などの特産品など限られた商品が取引されるにとどまるなど各地域の経済的な関係は限定的であった。ヨーロッパのこのような状況が変化し地域間の経済的な相互関係が深まったのは中世末期（14～15世紀）においてである。中世末期には飢饉の頻発や疫病の流行などで農業生産および人口が減少し多くの地域では社会的・経済的な危機をむかえた一方で、商業のあり方にも変化が生じ、流通・金融において中心的な役割をはたす都市を核とした階層的な流通ネットワークが形成され、それまでは基本的に地域内流通にとどまっていた穀物や木材といった様々な「重量財」や安価な織物などの日用品が地域を越えて流通しはじめた。このような流通品目の多様化と量的拡大とともに一部の地域では環境・技術・市場などの要因を受けた特産地の形成が促進されていた。16世紀には、このような社会経済構造の変化が加速し、ヨーロッパ外の地域をふくむ経済的な相互関係が深まると同時に各地域の経済構造の差異・格差が拡大した²⁾。

このような中世末期より次第にヨーロッパ各地の経済的な相互関係が深まるとともに諸国

間の利害が複雑に関係する中で、いわゆる諸国家併存体制が形成された。アジア諸地域と比較したヨーロッパの特徴とされる諸国家併存体制の下でヨーロッパは、アジアでの清、オスマン帝国などの一つの帝国により統治された地域とは異なり、経済的に相互に関係する地域が多く、多くの国家に分かれた結果、国境を越える経済関係だけでなく、経済的に結びついていた地域が政治的に分断されるという状況も生じ、これらの状況が政治的対立・戦争の要因ともなってきた。第2次世界大戦後のEU設立にいたる欧州統合の流れは、上記のように2度にわたる世界大戦への反省がその起点とされる。しかし、第2次世界大戦後の欧州統合が進展したことのみならず、このような政治的対立の帰着としての世界大戦が生じたこと自体が、近代初頭よりのヨーロッパにおける相互連関の高まりの反映といえるものであり、いわゆる第2次世界大戦後のヨーロッパの統合は、より長期的な統合の過程における諸国家間の対立と協調の動きの一部として位置づけて考えることが重要である。

ヨーロッパの統合へ向けた変化の端緒となった中世末期から近代初頭において、ヨーロッパの商業・金融の中心であったのは、現在のベネルクス3国および北フランスの一部に相当する低地地方の都市、ブルッヘ、アントウェルペン、アムステルダムである。これらの3都市はそれぞれ15、16、17世紀のヨーロッパの統合の進展に重要な役割をはたした。ところが、次節において検討するように16世紀末に低地地方が南北に分かれベルギー、オランダとなった経緯もあり、ベルギー、オランダ両国においてそれぞれの特徴とされる事象を焦点として歴史研究が進み、中世末期から近代初頭についても南北低地地方社会にみられる対照性や南から北への中心の移行が注目され、低地地方全体としてヨーロッパの経済的な統合にどのような役割をはたしたかについては十分に検討されてこなかったという面がある。そこで本論文では、まず、ベルギー、オランダへと分かれて発展した経緯を整理した上で、両国成立の経緯を受けた低地地方経済史研究の特徴を考察し、近年の研究にみられる、中世末期から近代初頭の低地地方全体としての欧州統合における歴史的役割の研究を進めるにあたっての新たな動きを明らかにする。³⁾

2 ベルギー、オランダの成立の経緯と経済史研究の特徴

低地地方は北緯50～53度の北海沿岸に位置し北海に注ぎ込むライン、マース、スヘルデ河口部に形成された複合デルタ地帯などの低地がその国土の多くを占めていることからこの名がある。ただし、低地地方の政治的な統一が進んだのは14世紀末にフランドル伯位を継承したフランス王弟を始祖とするブルゴーニュ公家が近隣のブラバント公、ホラント伯などを兼ねることとなった15世紀前半以降のことである。

低地地方統一の中核地域となった現代のベルギーにほぼ相当する南低地地方は、中世初頭においてヨーロッパの主要地域を統一したフランク王国の発祥の地であるとともにラテン語

圏とゲルマン語圏の境界地域であった。同地域は先史時代にはケルト系のベルガエ人が居住した地域でカエサルにより征服されローマ帝国の支配下に入り、ベルギカ属州がおかれた。3世紀より同地の北海沿岸を中心に次第に定住したフランク族を5世紀末に統一したメロヴィング朝のクロヴィスが支配地域を拡大するとともにカトリックに改宗した。800年にローマ教皇レオ3世により皇帝戴冠を受けたカロリング朝のカルル（神聖ローマ皇帝としてのカルル大帝、シャルルマーニュ）の下でフランク王国の版図はほぼ最大に達し、王宮のおかれたアーヘンをふくむ南低地地方は帝国の中核地域として大土地所領などが発達をみせた。しかし、息子ルートビヒ王の死後843年のヴェルダン条約によりスヘルデ川以東は長子ロタール、以西は末子シャルル（西フランク王国始祖）領となった。その後の870年のメルセン条約では東西フランク王国によるロタール領の分割によりマース川以西が西フランク王国に属したが、880年のリブモン条約によりスヘルデ川が東西フランク王国の境界として確定した。これにより、3世紀以降のフランク族の定住地となっていたスヘルデ川以西のゲルマン語地域が西フランク（フランス）領、スヘルデ川以東のローマ帝国の俗ラテン語（後のワロン語）地域が東フランク（ドイツ帝国）領という政治的境界と言語境界のずれが生じた。さらに、西フランク王国におけるフランク族系貴族のフランス語化によりスヘルデ川以西のゲルマン語（後のオランダ語）地域では貴族層と庶民層の使用言語が異なる言語併存状況が生じた。⁴⁾

フランス王国に属することになったスヘルデ川以西のゲルマン語地域は有力諸侯であるフランドル伯が統治するフランドル（オランダ語ではフランデレン）伯領となり、中世におけるアルプス以北のヨーロッパ最大の商工業地域へと発展し、イングランドから輸入した長繊維の羊毛などを用いた高級毛織物はイタリア商人により地中海地域に、ドイツ商人によりドイツ、バルト海地域に輸出されるとともに、隣接のブラバント、エノーなどでも次第に商工業が発展し、南低地地方は北イタリアに並ぶ都市化が進んだ人口密度が高い地域となった。特にブルッヘ（仏語・英語ブルージュ）、ヘント（仏語ガン、英語ゲント）、イーペル（仏語イーブル）のフランドルの3都市は、経済のみならず政治的にも重要な役割をはたし、オランダ語が都市などの公式言語として用いられるようになるとともに、イタリア商人が定住しドイツ・ハンザの商館がおかれたブルッヘは、遠距離貿易の拠点としてヨーロッパ有数の商業・金融の中心となり、同都市に成立した取引所（ブール）はその後の取引所の原型となった。⁵⁾

一方、現在のオランダとなる北低地地方は、ローマ帝国の支配に服することがなかった地域であり、北海沿岸の多くはほとんど人の住まない低湿地であった。10世紀以降にこれらの低湿地でも散発的ながら定住が進んだ。その過程で堤防の構築や排水路の開削が行われ、これらの干拓に関わる形でその後のオランダの特徴となる「共同体」を基盤とする社会構造が形成されるとともに、13世紀には干拓地や砂質土壌である北部の土地の多くでは牧畜業が発

展し沿海部では漁業も行われた。商業については、中世初期のフリース人による北海交易が衰えた後に、ホラントのユトレヒト、マース河口部のドルトレヒト、スヘルデ川河口のミデルブルクが北海とライン地域、南低地地方とを結ぶ商業ルートが次第に発達し、14世紀以降のホラントでは市場向け農産物の生産が拡大するとともにライデンをはじめ毛織物・亜麻織物などの繊維産業がみられるようになっていた。⁶⁾

前述のように15世紀前半にその多くがブルゴーニュ公国に属することになった低地地方では、ブラバントのブリュッセルが公国の首都の役割をはたすなどフランドル以外の地域の重要性が次第に増加し、本領のブルゴーニュ公領以上に公国にとって政治的・経済的に重要な地域となった。このブルゴーニュ公領低地地方の大半は1477年のブルゴーニュ公シャルルの死によりハプスブルク家が継承することとなり、1500年にフランドルのヘントで生まれ1507年にスペイン王、1514年に神聖ローマ皇帝となったカールの下で低地地方は「一七州」として制度的にも統一化が進んだ。同時期にスヘルデ川中流に位置するブラバントのアントウェルペンが急速な発展をとげ、ヨーロッパ内の流通のみならずスペイン、ポルトガルの海外植民地からの銀や熱帯産品も集積するヨーロッパ最大の商業・金融の中心となり、1532年に設立された新取引所では日常的な決済が可能となり、さらに、政府債や裏書きされた手形が金融商品として取引され、低地地方はハプスブルク朝財政の上でも最も重要な地域となった。⁷⁾

ネーデルラント連邦共和国（オランダ）の成立につながった1560年代からの低地地方の反乱は、オランダ独立の観点で「80年戦争」との名称も用いられるが、その始まりにおいては、カールよりスペインとともに低地地方を受けついだ息子のフィリップ（スペイン王としてはフェリペ2世）の下でのハプスブルク朝財政を支える地域としての重税政策などに対する南の諸州を中心とした反乱であった。しかし、当初の反乱の中心であった南部諸州はスペイン軍の支配するところとなり1585年にはアントウェルペンも陥落し、多くの商人、職人などが南部諸州を離れた。それに対して、1579年にユトレヒト同盟を結んだ北部7州が抵抗を続け、16世紀末には実質的な独立を達成し1648年のウェストファリア条約においてスペインが公式にその独立を認めた。⁸⁾

このようにして成立したオランダは17世紀の「黄金時代」をむかえ、ホラントのアムステルダムがアントウェルペンに代わりヨーロッパの貿易・金融の中心となるとともに、16世紀末に成立していた諸都市の東インド会社を合同して成立したオランダ東インド会社がポルトガル商人に代わりインド洋、アジア貿易に主導的な役割をはたした。また、低地地方の南部諸州のみならず各国からの移民を受け入れたオランダでは、カルヴァン派が社会的に最も重要な位置をしめるとはいえ、ユダヤ人の移住も認める「宗教的に寛容な社会」であり、ヨーロッパ各国商人がオランダ国籍をとり、その商業ネットワークを強化しただけでなく、様々な職種の職人などの移民が経済成長にともなって多様化した手工業製品需要に応えた。オラ

ンダの経済的繁栄に関しては、イギリス、フランスの台頭もありその絶頂期は短く、1652年からの3次にわたる英蘭戦争により大きな打撃を受けたとされてきた。しかし、近年になり英蘭両国の相互関係の強さと経済的移行の連続性が注目されるようになっている。政治的には1674年にウエストミンスター条約で英蘭戦争の和議が成立し、連邦共和国総督職のオラニエ家ウレム3世が当時のイギリス王の姪メアリーと婚姻し、1688年の名誉革命により英蘭同君連合が成立するとともに1694年のイングランド銀行の設立やその後のロンドン金融業の発展にはオランダの金融業・資金が大きな役割をはたしており、職人の移住など庶民レベルで両国の人的交流も活発であった。さらに、オランダの経済活動に大きな打撃をあたえた18世紀末からのフランス支配はナポレオン敗北により終結し、イギリスに亡命していたオラニエ家ウレムを国王とするネーデルラント王国が南北低地地方を統一する形でウィーン会議により成立した。しかし、統一期間は短く1830年の南の反乱、翌年の独立後は、南に比べて工業化は遅れるものの、商業、金融、産業化した農業に特徴をもち、19世紀末にはユニレバー、ロイヤル・ダッチ・シェルなど英蘭合同の巨大企業が形成され、オランダはイギリスさらにアメリカ合衆国との深いつながりをもつ「大陸のアングロ・サクソン国家」となった。⁹⁾

一方、スペイン・ハプスブルクの支配にとどまった南低地地方は、商人、職人の域外流出、アントウェルペン陥落とその後のオランダによるスヘルデ川封鎖などにより経済的に大きな打撃を受けたものの、商業・金融の活動は対象地域を縮小した形で続き、さらに、スペイン領ラテンアメリカに向けた新毛織物、亜麻織物業などとともに生産性の高い農業も行われる、ヨーロッパで有数の人口密度の高く都市化が進んだ地域であり続けた。社会構造の上では、イエズス会などによる再カトリック化が進むとともに、スペイン、オーストリア・ハプスブルク、フランス（共和国、第一帝政）と外国による統治が続く中で、オランダ語の俗語化・方言化が進展し、公用語となったフランス語を用いる上層市民・貴族層と、北ではオランダ語方言（フランス語による総称としてのフラマン語）、南ではワロン語を用いる中下層市民・農民との間の言語的分化も進んだ。このような中で18世紀末より南のエノー、リエージュにおいての石炭・製鉄業がフランス語を用いる上層市民層の主導の下で進展し、大陸ヨーロッパ諸国の中では最も早期に工業化が進展した地域となった。1830年のフランス七月革命後に、このような上層市民の主導によりネーデルラント王国からの分離独立を求める反乱が起こり、翌1831年にイギリスに滞在していたザクセン＝コーブルク＝ゴダ公レオポルドを国王とするベルギー王国が成立した。独立後のベルギーは自由主義の政権の下で、自由貿易、石炭・製鉄業を核とした工業化に対応する法体制・金融制度が整えられ、また、政治的には大国間の緩衝地帯としての性格をもち、1839年のロンドン条約では永世中立国となった。このような政治経済情勢の中で、ベルギー、ドイツ、フランスの製鉄業が資本・技術・人の相互の結びつきの中で発達した。既に述べたように、フランス、ドイツ、ベルギー、ルクセンブルク

間の国境を越えた石炭・鉄鋼業の連関が政治的に分断されたことが第2次世界大戦の遠因となるとともに、もともとこのような連関があったことが1950年設立の石炭鉄鋼共同体の設立の基盤ともなった。¹⁰⁾

以上のような歴史的経緯から、ベルギーとオランダ両国は多くの点で対照的な性格をもつにいたった。19世紀後半に近代的な学問となった歴史研究では、いわば「各国史」の枠組みでそれぞれの国の特徴的な事象に重点をおく形で進められ、ベルギーでは、南低地地方が最も繁栄した中世初盛期から近代初頭ならびに18世紀末以降が最も関心を集め、経済史では中世初期の大土地所領の形成、中世盛期以降の領主制の変化、農業の発展、都市の成立とその後の商工業の発展とともに他のヨーロッパ大陸諸国に先駆けた工業化、金融・経済政策、労働運動などを重要なテーマとして研究が進められてきた。一方、オランダでは、連邦共和国成立以降の北低地地方を主対象として、経済史では黄金時代である17世紀のアムステルダムを中心とした商業・金融、東インド会社を中心とする貿易、植民地とともにその後のオランダ農業の特徴をつくった干拓地などでの農牧業の展開、ならびに19世紀末からの英蘭合同企業など大企業の発展やオランダ型の社会構造を重要なテーマとして研究が続けられてきた。

このためヨーロッパの商業・金融の中心としての低地地方の役割をはたした中世末期から近代初頭についても、16世紀末のネーデルラント連邦共和国の成立を画期とする南から北への経済的中心の移行を前提として研究が進められ、「中世と近代」、「カトリックとプロテスタント」、「受動性と能動性」などの南北低地地方の社会経済構造の特徴とその対照性が注目されてきた。

ベルギーでは、アントウェルペン陥落までの中世からハプスブルク朝期をふくむブルゴーニュ領ネーデルラントにいたる時期の社会経済構造を中心に研究が進められ、ブルッヘからアントウェルペンへの中心都市の移行と関係して、特権的な自治権を獲得したヘント、ブルッヘ、イーペルが主導した経済活動に対する規制の多い中世的政治経済構造の特徴をみせるフランドルと特権的な都市の自治権が弱く公の領域的行政の下でより自由な形で経済活動が行われたブラバントという地域的な対照性が規制から自由へという時代的发展性が、また、北低地地方との違いとして、アムステルダムがオランダ商人が世界各地に出て行く能動型の中心であるのに対して、ブルッヘ、アントウェルペンが外国商人が来訪する受動型の中心であることなどが注目されてきた。しかし、近年の研究では、14世紀から16世紀にいたる地域内分業の進展や都市上層が重要な役割をはたした領域としてのボトムアップ型の行政組織の連続的な発展、低地地方内都市間の様々なネットワークの拡大・深化など、これらのフランドルとブラバント、中世から近代へという地域的・時代的差異を包括した連続的な構造変化が注目されるようになっている。¹¹⁾

一方、オランダでは、ネーデルラント連邦共和国の成立以降に研究の重点がおかれ、ヨー

ロッパ外との貿易および植民地支配の実態とともにオランダの社会経済構造の「近代性」、とりわけ、イギリス、アメリカに先行する「最初の近代国家」であるがゆえの近代性のもつ先駆性、初期性（時として限界性、不完全性）が大きな関心を集めており、「ヘゲモニー論」に基づく研究、グローバルヒストリーの研究におけるオランダの位置づけもこれらの先行研究の成果によるところが大きい¹²⁾。さらに、オランダ型社会の形成自体に関しては、北低地地方としての自立的発展要素と南からの移入的要素のどちらかがより重要であるかということが研究上の大きな問題となってきた。それとともに「開かれた社会」の形成とも関係して南低地地方からの商人、職人などの移住にとどまらないヨーロッパ各地からの移住についての研究が進み、アムステルダムが能動型の中心となるにあたっての各国商人のオランダ人化の重要性も明らかにされるにいたった。貿易に関しては、北の自立的発展要素としてのバルト海貿易と南からの移入的要素としての植民地貿易のどちらがより重要かということを中心に大きな論点として研究が進み、さらに、近年では、金融・決済の中心としての機能と実際の物流とは異なることが明らかにされるとともに、海運バルト海貿易そのものが南低地地方を核とした低地地方内部の分業の進展との関連で研究されるようになって¹³⁾いる。

以上のように中世末期から近代初頭の低地地方の社会経済構造についてベルギー、オランダそれぞれにおいていわば「各国史」の枠での特徴や対照性に焦点をあてる形で研究が進められてきたが、近年では、低地地方全体として、同時期を連続的な形で考察しようとする研究の観点もみられるようになって¹⁴⁾いる。

3 中世末期から近代初頭における低地地方における中心都市の遷移と構造的変化

第2節で述べたように、近年にはベルギー、オランダにおける研究者の流動性が高まる中で、これまでの「各国史」の枠組みでの北と南の連続と断絶、受動的か能動的かという対照性を越えた新しい研究がみられる。

2010年に出された W. ブロックマンスによる *Metropolen aan de Noordzee* は、これまでの自身およびベルギー、オランダでの研究成果をふまえ、中世盛期から近代初頭（1100–1560年）における低地地方の中心都市の遷移を、ヨーロッパの貿易ネットワークにおける位置の変化および地域内連関の高まりをより連続的な枠組みでとらえる研究であり、低地地方としての地域内連関の高まりと平行する形で、低地地方における中心都市がアラス、ブルッヘ、アントウェルペンと、都市人口を倍増させながらその中心都市としての機能も拡大していったことを様々な角度から分析している¹⁵⁾。さらに、2013年に出された O. ヘルダーブロムによる *Cities of Commerce* では1250–1650年について低地地方の都市の商業の諸機能について分析を行っている¹⁶⁾。

ブルッヘからアントウェルペンへの遷移はこれまでも多くの研究でとりあげられていたこ

とであるが、W. ブロックマンズによる同研究は、現在はフランスに属するアラスを最初の中心都市として位置づけたとことで、低地地方における毛織物業の発展とそれに連動したヨーロッパ他地域との貿易関係の拡大・深化をより連続的に分析することに成功している。

12世紀よりの低地地方の商業ネットワークは、まず、シャンパーニュの大都市を経由する南北ルートが最も重要であったが、13世紀以降には、ドイツ商人による北海・バルト海をつなぐドイツ・ハンザ商人による東西ルート、また、西地中海の安全化による海路によるイタリアとの連結ルートが比重を増している。ブルッヘの中心都市としての重要性の増大はこのような商業ルートの変化と関係しており、フランス語地域の諸都市でも行われていた毛織物業においてもイーペルやヘントにおけるイングランドから輸入した長繊維の羊毛などを用いた高級毛織物がより重要になり、低地地方内の地域連関が強まる中でフランス語地域はフランドル主要都市への穀物供給地域としての性格を強めている。

ブルッヘからアントウェルペンへの遷移については水路が土砂で埋まったという地理的な要因に加えてフランドルとブラバントの取引における自由度の違いからのドイツ商人、イギリス商人の動向が遷移の要因として注目されてきたが、商業ルートの拡大という点では、スペイン、ポルトガルによる海上ルートとの連結に加えて、ライン川流域ならびに北低地地方との商業ルートが存在していたことがアントウェルペンの中心都市としての役割を大きく強化している。アントウェルペンはブルッヘに比べて対外的な商業ネットワークが大きく拡大しただけでなく、南北低地地方がより結びつきを強める中で地域内流通の中心としても機能しており、アラスやブルッヘが対外的な貿易の拠点ではあっても地域内流通の中心ではなかったこととは対照性をもっていた。さらに、同時期のアムステルダムは、北海、バルト海地域とアントウェルペンをつなぐ上で重要な役割をはたしていた。

また、この時期の低地地方は地域連関が高まっただけでなく、市場経済化および地域統合を促進する社会経済構造や経済的な自由を保証する制度を可能にするボトムアップ型の政策決定構造が発達してきており、これらの社会経済構造における変化が、それぞれの時期の中心都市としてのあり方にも大きな影響をあたえていた。

このようにアラス、ブルッヘ、アントウェルペンへという低地地方の中心都市の遷移は低地地方としての地域内連関の高まりと平行する形で中心都市としての機能も強化され、それぞれの都市を核とする流通ネットワークも拡大していたものであったのに対して、アントウェルペンからアムステルダムへの遷移は、アントウェルペンを核として形成されていた他地域との流通ネットワークならびに低地地方内部の地域連関の一部分を引き継ぐ形になっていることに注目する必要がある。¹⁷⁾

16世紀後半の低地地方の反乱とそれに続くヨーロッパの流通の中心であったアントウェルペンの1685年の陥落は、アントウェルペンの中心都市としての機能に依拠していた諸地域に

大きな影響をあたえることになる。アントウェルペンとロンドンの間の貿易に大きく依存していたイギリスは、自国商船による貿易に注力することとなり、オランダもバルト海貿易に加えてアジア、カリブ海貿易へと活動の範囲を広げ、両国は多くの地域で競合関係に入ることになる。逆にいえば、16世紀のアントウェルペンを中心とする流通ネットワークの中では、直接的に競合することなく、それぞれ棲み分けていたといえる。

これまでのI. ウォーラーステインなど近代ヨーロッパにおける覇権に関する研究においては、他国に先立ち近代的な国家を形成したオランダ、イギリスが、カール5世の挫折ともされる16世紀のハプスブルク帝国を核としたヨーロッパの「政治的統一」が崩れる中で交代する形で覇権をにぎり主導的な役割をはたしてきたと考えられており、カールを最後の中世カトリック的な皇帝、また、ハプスブルク帝国を核としたヨーロッパの「政治的統一」が崩れることによる近代の諸国家併存体制の形成という見方もなされてきた¹⁸⁾。しかし、本論文で明らかにしたように、中世末期から近代初頭のヨーロッパ各地の経済的な相互関係の深化に重要な役割をはたした低地地方の中心都市の役割は、ハプスブルク帝国を核としたヨーロッパの「政治的統一」や17世紀以降の覇権という概念とは異なる他地域および周辺地域との相互関係により成立しているものであったといえ、諸国家併存体制の形成を考える上でも、低地地方を地域外との経済関係の拡大と平行して地域内の連関・分業関係を深化させた一つの地域として理解することが重要になっている。

注

- 1) 石炭鉄鋼業の発展におけるベルギー、ドイツ、フランスの相互関係についての日本の研究としては、石坂（1999, 2001）。
- 2) Wallerstein（1974）はこのような格差をとともう15世紀末以降の経済発展を包括的に分析し、16世紀に「資本主義的世界経済」が誕生したとする「近代世界システム」の記念碑的な研究であり、同書を第1巻とする全4巻の新版を基に名古屋大学出版会から新訳が出された。
- 3) 例えば、Blom & Lamberts (eds.) (1st: 1993 4th: 2005) など、ベルギーとオランダの研究者が協力した低地地方史通史では近年のものでも、それぞれの時期の両国の状況を記述するという形をとっている。
- 4) 中世初期の低地地方の言語状況についての日本の研究としては河崎、クレインス（2002）がある。
- 5) フランドル毛織物業についての日本の研究としては藤井（1998）、都市の成立、流通の研究としては山田（2001）。また、中世盛期の都市、ブルッヘにおける金融の発展についての近年の研究としてはMurray（2005）。
- 6) 中世の北部低地地方の毛織物業に関する日本の研究としては佐藤（2007）。
- 7) アントウェルペンの興隆に関する画期となった研究としてはVan der Wee（1963）、日本における研究としては中澤（1993）。カール5世の生誕500年にあたる2000年の前後にカール5世に関

する多くの著書が出された中で同時代の社会経済に焦点をあてた論文集としては Blockmans & Mout (2004) がある。

- 8) このため、低地地方の反乱については、南においてまず生じたにもかかわらず、南部の反乱をオランダ（北部）の独立の前史的な位置づけで考察されることが多い。例えば Tracy (2008)、低地地方反乱およびオランダの独立に関する日本の研究としては川口（1995）。
- 9) このようなオランダの開放性、アングロ・サクソン国家としての特徴は、その海洋性と深く結びついていると考えられている。経済史においても中世以来の北海、バルト海を介したイギリス、北欧諸国との貿易・交流、また、近代以降はヨーロッパ外地域との貿易・交流が重要な焦点となってきた。オランダの海外貿易については多岐にわたる研究があるが、北海沿岸地域の相互関係については Nicholas (2009)。バルト海の穀物貿易については Tielhof (2002)、日本の研究としては、玉木 (2008, 2009, 2013)。
- 10) ヨーロッパ統合におけるベルギーの役割についての日本の研究としては小島 (2000, 2007a, 2007b)。
- 11) ブルゴーニュ公国期として低地地方を包括的に考察した代表的な研究として Blockmans & Prevenier (1997)。
- 12) オランダ経済の近代性という観点での画期的研究とされているのが de Vries & van der Woude, (1997) がある。ドゥ・フリースによるマクロ経済分析を用いた先行研究として de Vries (1974)、産業革命以前からの生産性向上による経済成長を分析した de Vries (2008)、オランダ本国の同種の研究として Zanden (1993, 2009) がある。グローバルヒストリーにおける画期となった Pomeranz (2000) はこれらの研究成果をとりいれている。
- 13) アムステルダム商業のこのような特徴については Lesger (2001, 2006)。
- 14) Stabel, Blondé & Greve (eds.) (2000), O'Brien et al. (eds.) (2000), Limberger (2008)
- 15) Blockmans (2010)
- 16) Gelderblom (2013)、さらに領主制および農業と商業の流通制度についての研究としては Bavel (2010)。
- 17) 金融中心としての移行については Spufford (2002)。
- 18) Wallerstein (1974), Kennedy (1987), Kindleberger (1996)

参 考 文 献

- Bavel, B. van (2010), *Manors and markets: Economy and Society in the Low Countries, 500-1600*, Oxford.
- Blockmans, W. (2002), *Emperor Charles V: 1500-1558*, New York, 蘭語版: *Keizer Karel V 1500-1558*, Gent, 2000.
- Blockmans, W. (2010), *Metropolen aan de Noordzee: De Geschiedenis van Nederland 1100-1560*, Amsterdam.
- Blockmans, W. & Mout, N. (2004), *The world of Emperor Charles V*, Amsterdam.
- Blockmans, W. & Prevenier, W. (1997), *De Bourgondiërs: De Nederlanden op weg naar eenheid*, Amsterdam, 英語版: *The Promised land: The Low Countries under Burgundian Rule*, Philadelphia, 1999.
- Blom, J. C. H. & Lamberts, E. (eds.) (1st: 1993 4th: 2005), *Geschiedenis van de Nederlanden*,

- Amsterdam, 英語版: *History of the Low Countries*, New York, 1999.
- Blondé, B. et al. (eds.) (2006), *Buyers & sellers: retail circuits and practices in medieval and early modern Europe*, Turnhout.
- Blondé, B. et al. (eds.) (2009), *Fashioning old and new: changing consumer preferences in Europe (seventeenth-nineteenth centuries)*, Turnhout.
- Bochove, C. van (2008), *The economic consequences of the Dutch: economic integration around the North Sea, 1500-1800*, Amsterdam.
- Boxer, C. R. (1965), *The Dutch seaborne empire 1600-1800*, London.
- Braudel, F. (1979), *Civilisation matérielle, économie et capitalisme, XVe-XVIIIe siècle*, Paris, 邦語版: 村上光彦, 山本淳一訳 (1985-1999), 『物質文明・経済・資本主義15-18世紀』, みすず書房。
- de Vries, J. (1974), *The Dutch rural economy in the Golden Age, 1500-1700*, New Haven.
- de Vries, J. (2008), *The Industrious Revolution: consumer behavior and the household economy, 1650 to the present*, New York.
- de Vries, J. & van der Woude, Ad. (1997), *The First Modern Economy: Success, Failure, and Perseverance of the Dutch Economy, 1500-1815*, Cambridge, 蘭語版: *De Nedereland 1500-1815: De Eerste Ronde van Moderne Economische Groei*, Amsterdam, 1995, 邦語版: 大西吉之, 杉浦未樹訳 (2009), 『最初の近代経済——オランダ経済の成功・失敗と持続力 1500～1815——』, 名古屋大学出版会。
- Gelderblom, O. (2013), *Cities of Commerce: the institutional foundations of international trade in the Low Countries, 1250-1650*, Princeton.
- Howel, M. C. (2010), *Commerce before capitalism in Europe, 1300-1600*, Cambridge.
- Israel, J. I. (1989), *Dutch primacy in world trade, 1585-1740*, Oxford.
- Israel, J. I. (1995), *The Dutch Republic: its rise, greatness, and fall, 1477-1806*, Oxford.
- Jones, E. L. (1981), *The European Miracle: Environments, economies and geopolitics in the history of Europe and Asia*, Cambridge, 邦語版: 安元稔, 脇村孝平訳 (2000), 『ヨーロッパの奇跡——環境・経済・地政の比較史』, 名古屋大学出版会。
- Kennedy, P. (1987), *The Rise and fall of the Great Power*, New York, 邦語版: 鈴木主税訳 (1993), 『決定版 大国の興亡——1500年から2000年までの経済の変遷と軍事闘争——』, 草思社。
- Kindleberger, C. P. (1996), *World economic primacy: 1500 to 1990*, New York, 邦語版: 中島健二訳 (2002), 『経済大国興亡史: 1500-1990』, 岩波書店。
- Lesger, C. (2001), *Handel in Amsterdam ten tijde van de Opstand: kooplieden, commerciële expansie en verandering in de ruimtelijke economie van de Nederlanden, ca. 1550-ca. 1630*, Hilversum.
- Lesger, C. (2006), *The rise of the Amsterdam Market and Information Exchange: merchants, commercial expansion and change in the spatial Economy of the Low Countries, ca. 1550-1630*, Aldershot.
- Limberger, M. (2008), *Sixteenth-century Antwerp and its rural surroundings: social and economic changes in the hinterland of a commercial metropolis (ca. 1450-ca. 1570)*, Turnhout.
- Maddison, A. (2007), *Contours of the World Economy 1-2030 Ad: Essays in Macro-economic History*, Oxford.
- Marnef, G. (1996), *Antwerp in the age of Reformation: underground Protestantism in a commercial metropolis, 1550-1577*, Baltimore.

- Murray, J. M. (2005), *Bruges, cradle of capitalism, 1280-1390*, New York.
- Nicholas, D. (2009), *The Northern lands: Germanic Europe, c. 1270--c. 1500*, Malden.
- O'Brien, P. et al. (eds.) (2000), *Urban achievement in early modern Europe: golden ages in Antwerp, Amsterdam and London*, Cambridge.
- Persson, G. (1999), *Grain markets in Europe, 1500-1900: integration and deregulation*, Cambridge.
- Pomeranz, K. (2000), *The great divergence: China, Europe, and the making of the modern world economy*, Princeton.
- Pomeranz, K. & Topik, S. (1999), *The world that trade created: society, culture, and the world economy, 1400 to the present*, Annonk.
- Spufford, P. (2002), "From Antwerp and Amsterdam to London: The decline of financial centers in Europe", in *De Economist*, 154, 143-175.
- Stabel, P., Blondé, B. & Greve, A. (eds.) (2000), *International Trade in the Low Countries (14th - 16th Centuries)*, Leuven.
- Tielhof, M. van (2002), *The "Mother of all trades": the Baltic grain trade in Amsterdam from the late 16th to the early 19th century*, Leiden, 邦語版：玉木俊明，山本大丙訳（2005），『近世貿易の誕生：オランダの「母なる貿易」』，知泉書館。
- Tilly, C. & Blockmans, W. (eds.) (1994), *Cities and the rise of states in Europe, A.D. 1000 to 1800*, Boulder.
- Tracy, J. D. (2008), *The founding of the Dutch Republic: war, finance, and politics in Holland, 1572-1588*, New York.
- Tracy, J. D. (ed.) (1990), *The rise of merchant empires: long-distance trade in the early modern world, 1350-1750*, Cambridge.
- Van der Wee, H. (1963), *The growth of the Antwerp market and the European Economy (fourteenth-sixteenth centuries)*, Den Haag.
- Van der Wee, H. (1993), *The Low Countries in the early modern world*, Vermont.
- Van Houtte, J. A. (1977), *An economic history of the Low Countries 800-1800*, London.
- Wallerstein, I. (1974), *Capitalist agriculture and the origins of the European world-economy in the sixteenth century*, New York, 邦語新訳版：川北稔訳（2013），『近代世界システムⅠ——農業資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立——』，名古屋大学出版会。
- Wallerstein, I. (1980), *Mercantilism and the consolidation of the European world-economy, 1600-1750*, New York, 邦語新訳版：川北稔訳（2013），『近代世界システムⅡ——重商主義と「ヨーロッパ世界経済」の凝集1600～1750——』，名古屋大学出版会。
- Zanden, J. L. van (1993), *The rise and decline of Holland's economy: merchant capitalism and the labour market*, New York.
- Zanden, J. L. van (2009), *The long road to the Industrial Revolution: the European economy in a global perspective, 1000-1800*, Leiden.
- 石坂昭雄（1971），『オランダ型貿易国家の経済構造』，未来社。
- 石坂昭雄（1995），「ベルギーの経済発展とヨーロッパ経済——その経済史的考察（1830-1914）」，『経済学研究』（北海道大学），45(2)，179-194頁。

- 石坂昭雄 (1999, 2001), 「ザール＝ロレーヌ＝ルクセンブルク＝ベルギー石炭＝鉄鋼業地帯における地域間国際関係の形成と展開 (1815-1913): 国境地域における鉱工業の展開の経済史的事例研究 (1), (2), (3)」, 『経済と経営』(札幌大学), 30(2), 1-45頁, 31(4), 553-613頁, 32(2), 35-110頁。
- 奥西孝至 (2013), 『中世末期西ヨーロッパの市場と規制: 15世紀フランドレンの穀物流通』, 勁草書房。
- 川口博 (1995), 『身分制国家とネーデルランドの反乱』, 彩流社。
- 河崎靖, クレインス＝フレデリック (2002), 『低地諸国 (オランダ・ベルギー) の言語事情——ラテンとゲルマンの間で——』, 大学書林。
- 河原温 (2001), 『中世フランドルの都市と社会: 慈善の社会史』, 中央大学出版部。
- 小島健 (2000), 「ヨーロッパ統合の中核——ベネルクス経済同盟」, 渡辺尚編著『ヨーロッパの発見—地域史の中の国境と市場』, 有斐閣, 111-161頁。
- 小島健 (2007a), 『欧州建設とベルギー——統合の社会経済史的研究』, 日本経済評論社。
- 小島健 (2007b), 「EEC 設立におけるベネルクス経済同盟の役割」, 『経済学季報』(立正大学), 56(3/4), 45-77頁。
- 佐藤弘幸 (2007), 『西欧低地諸邦毛織物工業史: 技術革新と品質管理の経済史』, 日本経済評論社。
- 玉木俊明 (2008), 『北方ヨーロッパの商業と経済』, 知泉書館。
- 玉木俊明 (2009), 『近代ヨーロッパの誕生 オランダからイギリスへ』, 講談社。
- 玉木俊明 (2013), 『近代ヨーロッパの形成: 商人と国家の近代世界システム』, 創元社。
- 中澤勝三 (1993), 『アントウェルペン国際商業の世界』, 同文館出版。
- 藤井美男 (1998), 『中世後期南ネーデルラント毛織物工業史の研究: 工業構造の転換をめぐる理論と実証』, 九州大学出版会。
- 藤井美男 (2007), 『ブルゴーニュ国家とブリュッセル: 財政をめぐる形成期近代国家と中世都市』, ミネルヴァ書房。
- 松田武, 秋田茂編 (2002), 『ヘゲモニー国家と世界システム』, 山川出版社。
- 山田雅彦 (2001), 『中世フランドル都市の生成: 在地社会と商品流通』, ミネルヴァ書房。